夢奪う「宇宙の軍事化」

JAXA法改定
平和規定の危機

池内 了

この一年間、福島の原発事故関連の文章ばかりを書いてきた。原発再稼働の動きも強くなって予断を許さないのだが、他の重要な事柄を落とすわけにはいかないので、話題を広げていこうと思う。

日本には、「宇宙」と名が付く研究機関が三つ存在していた。一つは宇宙開発事業団で、気象観測衛星や通信衛星などの実用衛星を打ち上げる機関であった。もう一つは宇宙科学研究所で、宇宙や惑星をエックス線や赤外線を使って観測する科学衛星を打ち上げていた。三つ目は航空宇宙技術研究所で航空機など飛翔体の開発実験を行ってきた。

国の行政改革の折、同じような目的の機関が三つもあるのは税金のムダだとして、三機関を統合して独立行政法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）が発足したのは二〇〇三年であった（見事に三機関の名前が組み合わされている）。それを統括するJAXA法には宇宙開発を「平和の目的に限り」という平和規定が盛り込まれている。一九六九年の国会決議に基づき、日本の宇宙開発を「非軍事」とする精神が貫徹されてきたのである。

■すでに基本法改定

ところが、〇八年に成立した宇宙基本法において、六九年に衆参両議院で可決された「宇宙の開発は平和目的に限る」という決議を抹消し、「我が国の安全保障に資する宇宙開発利用を推進」という条項が書き込まれた。宇宙の軍事利用への道を拓くことになったのである。

その先駆けとして情報収集衛星五基が打ち上げられた（二基は打ち上げに失敗して使い物にならなくなった）。情報収集衛星の名目として「大規模災害時での上空からの撮影」が挙げられているのだが、実際はスパイ衛星である。というのは、この衛星によって得られた東日本大震災の惨状についての撮影データがあるはずだが、一切公開されていないのだ。これに対し、地球観測衛星「だいち」のデータが公開されている。宇宙の平和利用と軍事利用との大きな差異がわかるではないか。

■科学衛星でリード

わざわざ「大規模災害時の…」という名目を付さず、宇宙の軍事利用を堂々と推し進めるためにはJAXA法にある平和規定が邪魔になる。そこで今、上位の法律である宇宙基本法と抵触するという理由を付けて、JAXA法から平和規定を外すという法案が可決されようとしている。これで大手を振って宇宙の軍事利用に邁進できるというわけだ。平和憲法の下で戦争に巻き込まれずに来たことを忘れ、安全保障という名目で自衛官の海外派遣など軍事化の道を歩んでいる日本と二重写しになる。

日本は、数々の科学衛星によって世界をリードする業績を挙げてきた。研究者集団のボトムアップで衛星計画を練り、多彩な科学プロジェクトを成功させて世界の模範となったのだ。しかし、本格的な軍事利用が開始されればトップダウンになり、研究者の総意が活かされなくなるのは目に見えている。それどころか、日本の防衛のためと称して弾道ミサイルにまで手を出しかねないだろう。軍事化路線は、進み始めると止まらないからだ。

宇宙探査機「はやぶさ」効果もあったように、人々が宇宙に抱く夢やロマンは根強い。それは平和規定の下で、宇宙が軍事のために汚されていないことを人々が知っていたためでもある。スパイ衛星やレーザー兵器が飛び交う宇宙に誰が憧れを持つだろうか。

（いけうち・さとる＝総合研究大学院大教授）

波

宮下志朗によるラブレー『ガルガンチュアとパンタグリュエル』（ちくま文庫）の新訳

宮下志朗によるラブレー『ガルガンチュアとパンタグリュエル』（ちくま文庫）の新訳

辺一夫の神話的重圧を恐れぬ人はいないだろう。渡辺に対するノーベル賞作家・大江健三郎の崇敬もこの神

しかし二宮の「不肖の愛弟子」を任ずる宮下は軽やかに渡辺先生の呪縛を脱し、漢文脈を駆使した渡辺

れてゴキゲンな出来栄えだ。

本書後半は、木版画という宮下のもうひとつの得意

中国囲碁リーグに日本チーム初参加

日本棋院

日本棋院は、囲碁の中国乙級リーグに日本チームを初参加させることを決め、趙治勲二十五世本因坊を主将とする

黒板